

下商物語 (その二) 学校創立について

教諭 林 俊行

明治一七年(一八八四年)九月二六日に本校は、設立が認可され、この日から本校の歴史が始まります。ただし、開校は、同年の十月一八日(土)の午前九時に開業式が挙行され、この開業の日をもって本校創立記念の日としています。

創立当時の校名は、「赤間関商業講習所」で、善良な商人の養成を旨として、修業年限は二年半(半年が一期で、二年半をかけて卒業)で、修身・読書などの基礎教育と簿記・商業実習などの専門教育を学びましたが、実技実学専重の教育方針で、手足の自由に動く実用的人物の養成を目指し、商業実習教育の推進に力点を置かれたようです。このことは、本校にとつては当時の慶応義塾と神戸商業色にかなりの影響があったようです。その裏付けとして、当時の教育課程で、最も時間配当が多い科目(重点科目)は、「簿記」

で週六時間、次に、「算術、英語読書(よみかき)」といった順番で重視していたことからそれが伺えます。

ご承知のように、初代の所長は、福沢諭吉先生の従兄弟にあたる慶応義塾卒業の「中村英吉」先生でした。明治一九年四月に退任された。明治二五年に大阪で亡くなるまで講演されることが上手で、精力的に演説をされたとの記録が残っており、本校最初の部活動である講演部(明治二〇年)が創部されたことも影響があったのかも知れません。参考までに、野球部はその翌年に創部され現在に至っています。

最初の募集定員は、三〇名でしたが、入学を許可されたのは二八名で、募集定員には及ばなかったのですが、その後八名が入学して合計三六名が最初の年の生徒数でした。そのまま無事に卒業できた

のは、わずか五名(右写真)でした。なぜ、そんなに少ないかという点に關して、その当時の及落(落第)基準を調べてみると、①全学科目の総合成績が六〇点未満で、②一科目でも四〇点未満のどちらかに該当があれば落第とした大変厳しい規則であったからでした。もし、現在に当てはめてみるとどうでしょうか。問題のレベルも大変高かったようです。反面、優等生・平素よく精励努力している生徒に対しては、賞品が授けられたとの記録があります。余談ですが、大正時代から昭和の初期頃にかけての記録を見ると、教室の座席の配列は成績優秀者が



後ろで、下位の者は前列になっており座席を見ると成績が一目瞭然であったと記されていましたが、現在では、とてもそのような座席の配列は考えられませんね。

明治二〇年一月には、当時の文部大臣「森 有札」氏が本校に來校されたとの記録が残されています。本校をつぶさに見られて、本校の前途に対して大いに期待し希望を抱いて激励されたとのことです。当時の全校生徒・教職員みなさんの面目に輝いた様子が、目に見えるようです。

※この文章は、本校にある参考資料(千畳原史話、下商七〇年史、下商百年史、下商百二〇年記念誌)などを参考にしてまとめたものです。生徒の皆さんも図書館一階閲覧室にありますから、在学中に一読されることを勧めます。